

編 集 後 記

今年の夏季は、気温が高いだけでなく、例年になく日差しも痛く感じることとなりました。暦の上での「秋」は、いつからだったかをカレンダーで確認すると、今年の「立秋」は8月7日。この日の東京（千代田区北の丸公園）の最低気温は27.4℃（05:00）、最高気温は32.5℃（15:00）、とても秋が始まる日とは思えないほどでした。暑さも収まってくるとされる「処暑」（8月23日）よりも後の8月30日に本年の最高気温（38.5℃）を記録するほどの酷い夏でした。

昔はこんなに暑くなかったのではと考えて、気象庁のデータベースで8月の東京の気温を確認すると、大きく増加したのは、猛暑日、熱帯夜でした。バテないためには、猛暑を避けることは当たり前として、夜をいかに快適に過ごすかが重要となる気がします。

	真夏日数（最高気温）	猛暑日数	熱帯夜数（最低気温の最高）
1945年8月	23日（34.0℃）	0日	5日（25.4℃）
1985年8月	27日（33.9℃）	0日	8日（27.1℃）
2015年8月	19日（35.8℃）	4日	13日（27.6℃）
2025年8月	29日（38.5℃）	18日	24日（28.3℃）

注：真夏日は最高気温が30℃以上、猛暑日は最高気温が35℃以上、熱帯夜は夜間の最低気温が25℃以上。

夏の暑さによる農業への影響については、本号に掲載した加藤淳さんの「あずき博士の豆類歳時記」の中でも「かつては、春先の遅霜や風害に加え、夏場においてもオホーツク海高気圧の影響で極端な低温や日照不足による冷害が度々あり、農業生産には厳しい気象条件であったが、近年では農耕期間中の平均気温も高くなり、小麦、てん菜、馬鈴薯に次ぐ第四の畑作物である豆類の作付けが増加している。」との記述もあります。温暖化の緩和策も大切ですが、食料の安定的な確保のためには我が国全体で地球温暖化への適応策の準備が整っているのが重要となると考えられます。

また、「アルゼンチン調査団海外豆類事情調査結果の概要」では、「アルゼンチン国が日本への豆類輸出について強い関心を持っている」とのことなので、端境期対策や豊凶変動に対するバッファーとして考えるだけでなく、国内対策が万全の状態になるまでの食料の安定供給源として、温暖化の影響が北半球よりも緩やかな南半球の国との関係を保っておくことも重要となると考えられます。

今年の高湿・雨不足・豪雨など、極端気象或いは激甚気象により農産物の品質低下・収量減となっている地域もあるようです。そのことが次期作の作付け構成に及ぼす影響も心配です。また、今後のコメ増産の動きに伴う作付け構成の変化が、別の農産物の不足につながることも懸念されます。食料安保の観点からも、我が国の国土で多様な食料ができるだけ安定的に供給され続けられる状態となることを祈ります。（寺田 博幹）

発 行

公益財団法人 日本豆類協会
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-2-1
日土地内幸町 TEL：03-6268-8627
ビル2階 FAX：03-6268-8628

豆 類 時 報

No. 120

2025年9月15日発行

編 集

公益財団法人 日本特産農産物協会
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-15-1 フジタ TEL：03-6689-9428
人形町ビル7階 FAX：03-3663-7525